『語用論研究』第 20 号(2018 年) pp. 160-167
© 2018 年　日本語用論学会

[語用論の新しい流れ]

レヴィンソンが牽引するインタラクション研究

早野　　薫
日本女子大学

1.　はじめに

「咀嚼できないほどのものを口に詰め込んではいけない（“Don’t bite off more than you can chew.”）」(Levinson 2005: 434)。これは、レヴィンソンがシェグロフによる論考を批判するのに用いた比喩である。シェグロフは、「ミクロとマクロの間（Between micro and macro)」という論文の中で、マクロ（文化）レベルの規範がミクロ（インタラクション）レベルでの人々のふるまいを制約していると考える視点を転換させ、ミクロでの人々のふるまいこそがコンテクストを作り出している、と考えることの合理性を説いている(Schegloff 1987)。レヴィンソンは、シェグロフによるこの論考は、文化や、さらには文法までも、すべてインタラクションの産物とみなす「インタラクション還元主義」として理解されかねない、「危険な考え」(“Manny’s dangerous idea”）であるとして批判している。[1, 2]

その批判の中で、「咀嚼できないほどのものを口に詰め込んではいけない」という比喩は、研究者が依拠する理論や方法論の守備範囲をよく見極めることを促すために用いられている。会話分析はインタラクションの組織を記述することはできても、それで文化のすべてが記述されることにはならないし、インタラクションの組織と文法とが相互に干渉しあっていることはたしかであっても、だからといって文法に独自の構造がないということにはならない。研究者は、インタラクション、文化、文法を、それぞれ独自の組織とみな

[1] “Manny’s dangerous idea” というのは、レヴィンソン（Levinson 2005）の論文タイトルの一部。“Manny” は Emanuel Schegloff の愛称で、デネット（Dennett 1996）がダーウィンを批判した著書、*Darwin’s Dangerous Idea* をもじったものである。

[2] 研究者が還元主義に陥ることに対する批判は、レヴィンソン（2000）でも、関連性理論を対象にして行われている。

し、それに適した方法で研究するべきであり、自分が用いる方法論が許容する以上の主張をすることはできない、と。

ところが、レヴィンソンの研究業績に目を向けると、彼は、文法、文化、インタラクションどころか、認知、進化、発達、習得など、じつに広範にわたる現象を対象に研究しており、とてもではないが一人の研究者が「咀嚼」できる守備範囲に留まっているものとは思えない。それだけ幅広い現象に目を向けているのであるから、「還元主義」に陥るということはないにしても、一人の研究者がこれだけ広範な現象を研究対象にすれば、それは、「咀嚼できる以上のものを口に詰め込む」ことになりそうなものである。

しかし、レヴィンソンは、幅広い現象を、一つの理論的枠組み、方法論を用いて、一人で解明しようとしているわけではない。多様なバックグラウンドを持つプロジェクト・メンバーとの共同で、多様なアプローチを用いて研究を進めている。そうすることで、人間のコミュニケーションが成り立つ仕組みの全貌を見出そうとしているのである。彼がマックスプランク心理言語学研究所（Max Planck Institute for Psycholinguistics、以下MPI）、言語・認知グループ（Language and Cognition Group）のディレクターとして牽引してきたこの取り組みが持つ影響力は計り知れず、それをここで概括することは、筆者にはとてもできそうにない。そこで本稿では、インタラクション研究に焦点をしぼり、筆者が会話分析者としてMPIに身を置き、レヴィンソンに師事する中で触れることができたレヴィンソンが率いる研究チームのアプローチと、それがインタラクション研究、とくに会話分析にもたらしてきた影響、そしてそこから生まれている潮流について考えたい。

2. 多言語共同研究としてのインタラクション研究

もともと会話分析は、インタラクションを成立させるための根本的課題（順番に話す、トラブルに対処する、相互理解を積み重ねる）に対する解決策としての組織を記述することを目的としており、会話分析の研究方法は、この目的を果たすことに特化している。そうして記述されてきたインタラクションの組織は、言語、文化ごとの多様性を越えた、汎用性の高いものであることが、これまでの研究の中で示されてきている。しかし、その一方で、異なる文法を用いて、異なる文化においてインタラクションが行なわれるのであれば、そこには異なる制約が働いて当然であり（Levinson 2006、Sidnell 2009）、言語、文化による差異は、あるレベルでは観察可能であるはずである。問題は、普遍的な部分と、言語文化ごとに特殊な部分との両方を記述するにはどうしたら良いのか、ということである。[3]

[3] 1990年代には複数の言語を比較する会話分析研究が発表されている。しかしながら、林（2018）

レヴィンソンが長年ディレクターを務めた MPI の言語・認知グループは、多言語共同研究を通してこの課題に取り組み、方法論を模索してきた。MPI の言語・認知グループには、複数のメンバーが共同でプロジェクトに取り組むチームがいくつかあるが、筆者が MPI にいた時期（2007 年～2010 年）には、ターニャ・スタイバーズとニック・エンフィールドを中心に、マルチモーダル・インタラクション・プロジェクト（Multimodal Interaction Project）に取り組むチームが精力的に研究成果を挙げていた。そこでは、人物指示（Enfield & Stivers（eds.）2007）、順番交替（Stivers 他 2009）、質問連鎖（Stivers 他（eds.）2010）、認識性（Stivers 他 2011）など、特定のインタラクション現象に着目して、様々な言語を専門とする研究者がそれぞれのデータを分析し、その結果を集積することで、インタラクションの組織における普遍性と多様性の在り処が浮き彫りにされている。

例えば、人物指示表現の選択には、「最小限の形を用いよ」という指針（例：「MPI のディレクターのスティーブ」で、ではなく「スティーブ」を用いる）と、「可能ならば、相手の認識を促す形式を用いよ」という指針（相手が対象を認識できる（べきな）のであれば「私の指導教官」ではなく「スティーブ」を用いよ）が働いており（Sacks and Schegloff 1979）、これは、（おそらく）すべての言語について言えることである。レヴィンソンは、ロッセル島で話されるイェリ・ダニエ語において、人物指示表現は、この普遍的指針と、ロッセル島の言語文化の親族体系に則した特殊なシステムとが合わさって、その都度最適なものが選択されることを示している（Levinson 2005, 2007）。

このように、MPI の研究チームは、多様な言語のデータを分析し、その結果をミーティングやワークショップに持ち寄って比較、検討し、そしてその成果を論文集あるいは特集号として発表することで、インタラクションの普遍的な組織と、それとは別個に存在する個別の文化とがどのように組み合わさり、具現しているかを示してきた。スタイバースとエンフィールドが中心となって作ったこの潮流はその後も引き継がれ、発展し、修復の対照研究（Dingemanse & Enfield 2015）、リクルートメント（Kendrick & Drew 2016）、感謝（Floyd 他 2018）など、多くの現象について多様な言語データを対照した研究が量産されている。その成果を重ね、インタラクションの構造として想定される「可能性の領域」（“possibility space”, Dingemanse & Enfield 2015）を探る取り組みを、Dingemanse と Enfield（2015）は「会話構造の類型論」と呼んでいる。彼らがこのタームを投じたことにより、これまで断片的にしか行われてこなかった通言語的会話構造研究に、一つの枠組みを与え、より体系的に取り組みが広く進められていくことが想像される。

が指摘しているように、それらの研究の中には方法論上の課題を抱えるものもあり、その時期に会話分析的対照研究の方法が確立したということはできない。

3. インタラクションの量的研究

ここで特筆するべきなのは、これらの共同プロジェクトに関わっている研究者の多くは、会話分析のトレーニングを積んだ専門家ではなく、自分のフィールドの言語を専門に研究する言語学者だということである。多様なバックグラウンドを持つメンバーが共同で研究を進める中で、MPI のチームではインタラクションの対照研究の方法が次第に洗練化されていった。

前節で触れた人物指示に関わる研究成果を集めた論文集（Enfield & Stivers（eds.）2007）と、認識性をテーマとした論文集（Stivers 他 2011）は、注目する現象は共有されているものの、個々の研究者がそれぞれの切り口からそれぞれの言語データを基本的には質的に分析した論文をまとめたものだった。しかし、その後の発話交替のタイミングに関する研究（Stivers 他 2009）、質問連鎖に関する研究（Stivers 他（eds.）2010）は、現象だけではなく、分析の枠組みが厳密に共有されているという点で画期的なものだった。

そこで採用されたのは、会話分析的な質的分析方法と、コーディングにもとづく量的方法とを併用したアプローチである。スタイバースとエンフィールドも認めているように、コーディングし数量化するということは、その場で起きていることの細部をある程度は切り捨て、前もって用意された枠組みでデータを見ることを不可避的にする（Stivers & Enfield 2010）。そのような方法を採用することのデメリットを最小化するために、彼らは、コーディングの枠組みを質的分析に基づいて精査し、さらに、実際に研究者たちがコーディングをしながら、スキーマを改訂することを繰り返した。

だとしても、スタイバース達が推奨する量的分析は、会話の「傾向」ではなく、規範によって支えられる「組織」を記述することを目指す会話分析の視点に立つならば、「異端（heretical）」（Stivers 2015）であると言わざるを得ない。西阪（Nishizaka 2015）が論じている通り、数量化することで掴むことができるのは、ある現象がどれくらいの頻度で発生しているか、という事実（傾向）であるが、そのような事実は、会話参加者たちがなんらかの規範に依拠・志向してふるまった結果生まれたものであり、会話分析が質的分析によって掴もうとしているのは、この規範の方である。さらに、たとえ数字の上では規範から逸脱した行為が多く発生するという結果が出たとしても、その逸脱行為が「逸脱行為」として扱われているのであれば、それは「そのような規範は」ないということにはならず、むしろ、そのような規範が確かにある、という裏づけになるわけである（Nishizaka 2015）。

それでも、会話データを数量化することによって得られるメリットは大きい。数量化することによって初めて記述可能になる言語間の違いがある。例えば、スタイバースら（Stivers 他 2009）の研究では、質問に対して応答が与えられるタイミングについて、10 の言語の中にどのようなバリエーションがあるのかを鮮やかに記述している。また、会話

分析の手法を用いた研究の論文は多くの専門用語を用いて会話の細部を記述したものであるため、他の分野の研究者には理解されにくいこともあるが、統計データを用いることにより、他の分野の研究者にも理解され、そして応用されることが容易になる。その証拠に、量的分析を採用したインタラクション研究の多くは、自然科学系の論文を多く扱うジャーナル（例：Stivers et al. 2009）や医療系のジャーナル（例：Heritage 他 2007）等に掲載されており、会話分析研究の読者層を押し広げることに貢献している。

4. インタラクションへの学際的アプローチ

レヴィンソンの会話分析に対する関心は、決して周辺的な、にわか仕込みのものではない。1978 年のポライトネス論文（Brown & Levinson 1978）で既にサックス（Sacks 1987）やポメランツ（Pomerantz 1984）による「優先組織」の記述とポライトネスとの関わりについて論じているし、*Pragmatics*（Levinson 1983）では、会話分析を発話行為理論や談話分析が抱え持つ課題に対する解決策をもたらすものとして位置づけている。MPI でも、常に会話分析者をスタッフとして採用し、またゲストとしてシェグロフやジェファーソン、ヘリテージやドリューを含む会話分析の権威を定期的に招聘し、自身も含め、チームのスタッフが会話分析を学ぶ機会を確保した。語用論研究者としてのレヴィンソンが、会話分析を、インタラクションのメカニズムを記述する上で欠くことのできないピースの一つとして高く評価していることに間違いはない。

しかしながら、レヴィンソンのインタラクションに対する関心は、会話分析によって満たされるものではない。レヴィンソンは、「インタラクション・エンジン仮説」を立て、普遍的なのは、文法構造ではなく、言語習得の前提となるインタラクション能力であると論じている（Levinson 2006）。ここでレヴィンソンが考える「インタラクション能力」は、会話分析が記述の対象とする「インタラクション能力」よりも大きな枠組みで捉えたものである。会話分析者が解明しようとするインタラクション能力は、適切なタイミングで発話し、相手の発話を的確に理解し、相手に理解可能な発話を適切に産出する能力、であり、会話分析は、この能力を、会話参加者たちが、互いに（そして分析者にも）「見える」形で「やっていること」の中に見出す。それに対し、レヴィンソンが記述を目指すインタラクション能力は、会話参加者たちが「やっていること」を可能にする認知能力・認知プロセスも含むものである（Levinson 2016）。

そのような意味でのインタラクション能力の解明を目指し、レヴィンソンは、欧州研究会議上級助成金（European Research Council Advanced Grant）（2011 年～2016 年）を得て、学際的研究チームを編成した。このプロジェクトは、「言語の相互行為的基盤」をテーマに、インタラクション能力の全貌を明らかにしようとした。プロジェクトチームのメンバーには、アイトラッキングや EEG（脳波計）を用いる実験心理学者もおり、会話

分析者との共同で、前例のない学際的方法を採用したインタラクション研究を進めている。

その成果は、一方では、会話分析の中心的学術雑誌である *Research on Language and Social Interaction* で特集号（Kendrick 2017 など）を組んで発表され、仮説ではなく、先入観を排除して行われる「動機のない分析」（“unmotivated examination,” Schegloff 1996: 172）を出発点として研究を行なってきた会話分析に対し、仮説を出発点とした実験的アプローチに門戸を開くことを促している。他方では、心理学系の雑誌（*Frontiers in Psychology*）の特集号としても発表されており（Holler 他（eds.）2016）、会話分析が積み重ねてきた知見を、心理学者にもアクセス可能なものとしてプロモートするという副次的効果ももたらしている。

Kendrick（2017）が述べているように、実験的手法を用いたインタラクション研究は、会話分析が行なうインタラクション研究に取って代わるものではない。レヴィンソンのチームが目指すインタラクションの実験研究は、あくまで、会話分析的な「動機のない分析」によって得られた知見をもとに立てた仮説を出発点とするものだからである。会話分析者にとって、レヴィンソンを中心に始められたインタラクションの実験的研究は、会話分析の知見を心理学者と共有し、インタラクション研究のまだ見ぬ可能性を探る一助になるものとして歓迎するべきものと言うことができるだろう。

5. おわりに

会話分析にとって、レヴィンソンは、その誕生当初から良き理解者であり、言語学者、語用論研究者に向けてその価値を伝えてくれる良きスポークスパーソンであった。彼を中心としたチームが、多様な言語を対象に、量的分析、実験手法を採用した研究を行ない、それを認知科学に携わる研究者に広く発表することにより、会話分析のスポークスパーソンとしての彼の功績は、ますます揺るぎないものになっていくだろう。さらに今後は、彼の取り組みの影響力が会話分析の展開にも及ぶことは間違いない。こうした流れの中、それぞれの研究者、それぞれの研究手法が、互いを排して「還元主義」に陥ることなく、人間のインタラクションの成り立ちの全貌を明らかにすることが、レヴィンソンが望む今後の展開だろう。

参照文献

Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dennett, D. 1996. *Darwin's Dangerous Idea: Evolution and the Meanings of Life.* London:

Penguin.

Dingemanse, M. and N. J. Enfield. 2015. “Other-initiated Repair across Languages: Towards a Typology of Conversational Structures.” *Open Linguistics* 1, 98–118.

Enfield, N. E. and T. Stivers. (eds.). 2007. *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural and Social Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.

Floyd, S., G. Rossi, J. Baranova, J. Blythe, M. Dingemanse, K. H. Kendrick, J. Zinken and N. J. Enfield. 2018. “Universals and Cultural Diversity in the Expression of Gratitude.” *Royal Society Open Science* 5, 180391.

林 誠. 2018.「会話分析における対照研究」.『社会言語科学』21(1), 2–18.

Heritage, J., J. D. Robinson, M. N. Elliott, M. Beckett, and M. Wilkes. 2007. “Reducing Patients’ Unmet Concerns: The Difference One Word Can Make.” *Journal of General Internal Medicine* 22, 1429–1433.

Holler, J., K. H. Kendrick, M. Casillas and S.C. Levinson. (eds.) 2016. “Turn-Taking in Human Communicative Interaction.” *Frontiers in Psychology*.

Kendrick, K. H. 2017. “Using Conversation Analysis in the Lab.” *Research on Language and Social Interaction* 50(1), 1–11.

Kendrick, K. H. and P. Drew. 2016. “Recruitment: Offers, Requests, and the Organization of Assistance in Interaction.” *Research on Language and Social Interaction* 49(1), 1–19.

Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Levinson, S. C. 2000. *Presumptive Meaning: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge: MIT Press.

Levinson, S. C. 2005. “Living with Manny’s Dangerous Idea.” *Discourse Studies* 7(4–5), 431–453.

Levinson, S. C. 2006. “On the Human ‘Interaction Engine’.” In N. J. Enfield, & S. C. Levinson (eds.) *Roots of Human Sociality: Culture, Cognition and Interaction*, 39–69. Oxford: Berg.

Levinson, S. C. 2007. “Optimizing Person Reference: Perspectives from Usage on Rossel Island.” In N. Enfield & T. Stivers (eds.), *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural, and Social Perspectives*, 29–72. Cambridge: Cambridge University Press.

Levinson, S. C. 2016. “Turn-taking in Human Communication: Origins, and Implications for Language Processing.” *Trends in Cognitive Sciences* 20(1), 6–14.

Nishizaka, A. 2015. “Facts and Normative Connections: Two Different Worldviews.” *Research on Language and Social Interaction* 48(1), 26–31.

Pomerantz, A. 1984. “Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/dispreferred Turn Shapes.” In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 57–101. Cambridge: Cambridge University Press.

Sacks, H. 1987. “On the Preferences for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation.” In G. Button and R. R. E. Lee (eds.), *Talk and Social Organisation*, 54–69. Clevendon: Multilingual Matters.

Sacks, H. and E. A. Schegloff. 1979. “Two Preferences in the Organization of Reference to Persons and their Interaction.” In Psathas, G. (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 15–21. New York: Irvington Publishers.

Schegloff, E. A. 1987. “Between Micro and Macro: Contexts and Other Connections.” In J. Alexander, Bernhard Giesen, Richard Münch and Neil J. Smelser (eds.), *The Micro-Macro Link*, 207–234. Los Angeles: University of California Press.

Schegloff, E. A. 1996. “Confirming Allusions: Toward an Empirical Account of Action.” *American Journal of Sociology* 102: 161–216.

Sidnell, J. 2009. “Comparative Perspectives in Conversation Analysis.” In J. Sidnell (ed), *Conversation Analysis: Comparative Perspectives*, 3–27. Cambridge: Cambridge University Press.

Stivers, T. 2015. “Coding Social Interaction: A Heretical Notion in Conversation Analysis?” *Research on Language and Social Interaction* 48(1), 1–19.

Stivers, T., N. J. Enfield, P. Brown, C. Englert, M. Hayashi, T. Heinemann, G. Hoyman, F. Rossano, J. P. de Ruiter, K-E. Yoon and S. C. Levinson. 2009. “Universality and Cultural Specificity in Turn-taking in Conversation.” *Proceedings of the National Academy of Science* 106(26), 10587–92.

Stivers, T. and N. J. Enfield. 2010. A Coding Scheme for Question-response Sequences in Conversation. *Journal of Pragmatics* 42, 2620–2626.

Stivers, T., N. J. Enfield and S. C. Levinson (eds.). 2010. “Question- response Sequences in Conversation: A Comparison across 10 Languages.” *Journal of Pragmatics* 42(10).

Stivers, T., L. Mondada and J. Steensig (eds.). 2011. *The Morality of Knowledge in Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.